

青嶺

古
町
の
辻
の
賑
は
ひ
雪
解
ど
き

梅
鉢
の
幕
の
中
よ
り
初
鼓

雪嶺ををんな指さす有磯海

葉桜とんるまで母を引き止むる

ぜんまいを刺身というて山に棲み

牧開き出渋る牛の尻を押す

発電所夏めく水を落しけり

鉄棒に稲干す教師宿直明け

黒門町露地に杵屋の寒稽古

万灯会藤の挿頭の春日巫女

かぎろひの阿騎の大野の夜明かな

不比等邸跡に恋猫たてこもる

文楽のビラがひらひら桜餅

和歌の浦夕立過ぐれば潮招き

馬五頭ちやんちやん祭に狩り出さる

水替ふや太る金魚にももの言ひて

柚人の買ひたる鮎の一夜干し

夜の客藪蚊一匹連れて来し

新米を庖瘡神にひとつまみ

田の神の帰り支度は稲架の蔭

しぐるるや箔屋あめ屋の古き町

郭町道が乾けばまた時雨

このわたのほんの少しに酒二本

市振や尾花の先の波がしら

踏んづけてまた踏んづけて落葉籠

暮れ遅き世阿弥の島や潮曇り

花桐へ山の朝日が一直線

下町や簾に透ける夜の家族

触れてみる寝具売り場の竹夫人

雀斑の少女が仕切る地蔵盆

奪衣婆の笊に大きな山の芋

肩こりの膏葉匂ふ一葉忌

猪垣を結ふや吉野のをんな衆

焚初や蓋の重たき火消壺

野焼衆一揆のごとき身拵へ

落ちさうに飛んでゐるなり揚雲雀

阿豆流為の裔といふ顔ひき蛙

曾良の忌の輪中長島田植ゑどき

梅雨ざす水の佐屋路の水鶏塚

菖蒲守つばみ数へて帰りけり

草笛を上手に吹く子しんがりに

金魚売り酸素ボンベに跨がつて

をんどりとめんどりがみて冬温し

酉の市裸電球よき色に

揚げひばり声は欠片となつて落つ

末黒野や北へ北へと川細る

蜜蜂のてんやわんやの箱の蓋

祭馬どうしていいか分からぬ眼

夕方の鶏頭いよよ色の濃く

認識と抒情の間に豆を打つ

著者略歴

うち うみ りょう た
内 海 良 太 (本名・良雄)

昭和13年10月19日 東京都生まれ
昭和56年 「風」入会
昭和58年 転勤により新田祐久氏指導の小松句会
昭和62年 「風」同人
平成4年 風賞受賞
平成14年 「風」終刊により「万象」創刊同人参加
平成19年1月～28年3月 「万象」編集人

句集 青 嶺

平成二十八年十一月三日 発行

著者 内海良太

発行者 多田英治

発行所 有文社

埼玉県新座市石神三1-17-17
電話〇四二-四七五-〇四三六

二五〇〇円